



Title	川崎病の発病早期からの眼病変
Author(s)	藤本, 隆生
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35737
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	藤	本	隆	生
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7855	号	
学位授与の日付	昭和62年	8月	3日	
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	川崎病の発病早期からの眼病変			
論文審査委員	(主査)			
	教授	真鍋	禮三	
	(副査)			
	教授	薮内	百治	教授 井上 通敏

論文内容の要旨

〔目 的〕

1967年に川崎富作によって初めて報告された川崎病（小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群）は、系統的血管炎を主体とした全身の急性炎症性疾患であるとされ、全身的に多彩な病状を示すことが、川崎病診断の手引き（改訂4版）に詳しく記載されているが、眼科的には眼球結膜充血しか記されていない。眼球結膜充血以外の川崎病の眼病変については今迄少数例の報告しかみられない。そこで、多数の川崎病患者の眼病変を発病早期から経時的に詳細な観察をし、また川崎病の後遺症である冠動脈瘤と癌病変との関連についても検討した。

〔方 法〕

1984年5月から1986年4月までの2年間に明和病院小児科に入院した生後3ヶ月から6歳3ヶ月まで（平均1歳11ヶ月）の川崎病確実例44例（男26名、女18名）を対象とした。川崎病の診断は厚生省川崎病研究班作成の診断の手引（改訂4版）によった。

44例中36例は第1病週から、残り8例は第2病週から少なくとも週一回眼科外来で細隙燈顕微鏡検査および眼底検査をし、結膜充血については、毎日病室で観察をおこなった。

造影剤を使って眼底血管を調べる蛍光眼底検査は生後5ヶ月から6歳（平均2歳2ヶ月）の10例（男9名、女1名）に対し、虹彩炎（+）の時期に、10mg/kgのフルオレセインナトリウムを静注しておこなった。検査病日は第5病日から第21病日（平均10.1病日）であった。

〔成 績〕

1. 川崎病の眼病変について

- (1) 眼球結膜充血 44全例の両眼に認め、平均3.7病日に発現し平均7.4日間持続した
- (2) 虹彩炎 第1病週から観察した36例中26例(72%)、まだ第2病週から観察した8例中6例(75%)の両眼に認め、全44例に対する病週毎の出現頻度は第2病週48%、第3病週24%、第4病週7%、第5病週2.4%、第6病週0%であった。

虹彩炎の発現頻度は年齢による差は認めなかったが、男女別では、男は85%、女は63%と男で高頻度にみられた。また、眼科初診時には川崎病不全型で後日に確実例となった13例中10例で、眼科初診時に虹彩炎を認めた。

- (3) 結膜下出血 1例1眼に認めた。

- (4) 表層性角膜炎 1例2眼に認めた。

- (5) 眼底病変 全44例に精密眼底検査、虹彩炎を認めた32例中10例には蛍光眼底検査もおこなったが、眼底に著変を認めた例はなかった。

2. 川崎病の眼病変と冠動脈瘤

全44例中男5名(男児の19%)、女1名(女児の5.6%)の計6名(全体の14%)に冠動脈瘤を認めた。瘤(-)群に比べて瘤(+)群では、眼球結膜充血および虹彩炎の持続期間が長かった。また第1病週における虹彩炎の発現頻度も瘤(-)群では67%であるのに対し、瘤(+)群では100%であった。

逆に、虹彩炎(+)群と(-)群とで冠動脈瘤の発現頻度を調べてみると、虹彩炎(+)群では32例中6例(19)に冠動脈瘤を認めたのに対し、虹彩炎(-)群では冠動脈瘤を認めたものはなかった。

[総括]

44例の川崎病患児の眼病変を発病早期から経時的に詳細な観察をした。川崎病の眼病変は、眼球結膜充血と虹彩炎が主であり、その他に結膜下出血、角膜障害も認めたがいずれも稀なものであった。精密眼底検査の他に眼底血管の造影検査もおこなったが、眼底に病変を認めた例はなかった。川崎病では眼球結膜充血とともに虹彩炎が第1病週から高率に出現するので、虹彩炎を川崎病の主要症状の一つに加えれば、川崎病の早期診断に極めて有用であると考えた。また虹彩炎の有無およびその持続期間と冠動脈瘤発生との関連から虹彩炎は川崎病の重症度評価の参考になりうると考えた。

論文の審査結果の要旨

川崎病(小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群)は全身に多彩な病像を示すことが川崎病診断の手引に詳しく記載されているが、眼科的には眼球結膜充血しか記されておらず、川崎病の眼病変については不明な点が多い。

本論文で著者は多数の川崎病患児の眼病変を発病早期から経時的に詳細な観察及び検査をおこない、川崎病の主要な眼病変は球結膜充血と虹彩炎の二つであること、また眼底血管には異常がないことを明らかにした。

特に虹彩炎は発病第1週より高率に出現する点で川崎病の早期診断に極めて有用であること、更に、

その有無と持続時間は川崎病の後遺症である冠動脈瘤発生と関連がある点で虹彩炎は川崎病の重症度判定にも有用であることを明らかにした。

川崎病の眼病変の臨床像を明らかにした本論文は、医学博士論文として十分な価値がある。